

第1章

奇経八脈についての 基本的な解説と考察

私は30年にわたり奇経脈の生理的な役割を研究し、奇経脈の流注に関しても生理的な観点から理解をしてきました。これは、奇経脈とその走行上にある器官との生理的關係や、奇経脈の走行が正経脈上に重なる場合のその理由などが、私の興味の対象であったからです。たとえば、任脈は口を廻り目に到達しますが、任脈の口や目に対する働きは何であるのか、また、衝脈が下腿では足の太陰脾経を、腹部では足の少陰腎経を走行しているのは何故なのかということを追究してきました。

奇経脈の流注（走行部位）に関する研究については、恩師の山下詢先生の著書『臨床経絡経穴図解』（医歯薬出版）に詳しく記載されています。同書は、古典に記載された経絡と経穴に対する研究書として非常に高い評価を得ています。本書でも頻繁に参考文献としてしますので、ぜひご一読ください。

本章は、奇経脈の働きとその発現ルートという観点から、また臨床で経験した奇経脈の経脈現象をもとにして、書き進めてゆきたいと思います。奇経八脈の流注を考察するための原文については李時珍の『奇経八脈考』を採用し、督脈・任脈・衝脈の流注に関しては山下先生の研究をもとに、『十四経發揮』・『素問』骨空論・『靈樞』経脈篇・『和漢三才図会』などの古典から再度考察を行っています。

1 奇経八脈の種類とその分類についての考察

1 一般的な奇経脈の概念

経絡理論では、経絡には正経十二経脈（正経脈）と奇経八脈（奇経脈）があります。正

経脈は臓腑から派生し、気血津液を全身に供給しており、この気血津液によって生命の維持がなされています。これに対し、奇経脈は臓腑と直接的に連結はせず、正経脈間を貫いて走行し、正経脈の気血の調整を果たしていると考えられています。つまり、気血が正経脈に満ち溢れた場合には奇経脈に流れ込んで備蓄され、正経脈の気血が不足した場合にはそれを補充する形で奇経脈の気血が使用される、と認識されています。奇経脈のうち督脈と任脈は、この働きに加えてそれぞれ正経脈の陽経と陰経を統率するとされており、このため奇経脈のなかでも別格に扱われています。これを表す端的な例は、滑伯寿の経絡経穴に関する著書である『十四経發揮』の書名です。同書はこの書名からもわかるように、正経十二経脈に督脈と任脈を加えた十四経脈の重要性について説いた内容になっています。

奇経という名称について

奇経という名称は、正経に対する別の道筋という意味から付けられたとする説や、その流注が体幹部と下肢にしかないため「奇」の文字が使われたとする説などがあります。また、「奇恒の腑」（脳・髄・骨・脈・胆・女子胞を総称したもの）との関連が深いからとする説もあります。たしかに督脈は脳・髄と、そして任脈と衝脈は女子胞との関連が深く、本書においても奇恒の腑と奇経との生理的関係を内容の中核の一つとしています。

奇経八脈の循行経路・働き・所属経穴について

奇経脈には、督脈・任脈・衝脈・帶脈・陰維脈・陽維脈・陰蹻脈・陽蹻脈の計8脈があります。

所属経穴および循行順序については、『鍼灸甲乙経』『難経』『十四経發揮』『外台秘要』『奇経八脈考』などの書籍によって違いがあります。ここでは、督脈と任脈に関しては現行の学校教育で学習されている経穴を記載しました。本書の内容は『奇経八脈考』にもとづいて記述しているため、所属経穴や循行経路についても『奇経八脈考』を最も参考としています。ただし、『奇経八脈考』では、独自の視点により他の書籍と記載内容が違っていることも多く、それらに関しては行を変えて解説しています。

● 督脈

督脈の循行は、胞中より起こり、下って会陰に出て、脊柱の中を上行して、項の後方の風府に至り、頭に入り脳を絡します。また、項部から頭部の正中線に沿って上り、頭頂部・額部・鼻部・上唇を経て上唇小帯に至るとされています。

督脈には、「督」の字義から、「総督」「統率」の働きがあるとされています。督脈は、手足の三陽経と何度も交会しています。また陽経を維絡（複数の正経脈と交会し接続させること）する陽維脈は瘕門と風府において督脈に合流しており、これが全身の陽経脈を統率する根拠となっています。このことから、督脈は「陽脈の海」と呼ばれています。

また、脊柱の中を走行し、支脈が風府から頭の中に入って脳内に絡する（支脈によって接続されること）ことから、脊髓と脳を養うとされています。

督脈には正経脈に属さない独自の経穴が28穴あり、奇経脈で最も多い経穴数を有しています。所属する経穴は、長強・腰兪・腰陽関・命門・懸枢・脊中・中枢・筋縮・至陽・靈台・神道・身柱・陶道・大椎・瘕門・風府・脳戸・強間・後頂・百会・前頂・額会・上星・神庭・素髖・水溝・兌端・顴交です。